

第58回ジェンダーセッション

アートを通じたメモリーワーク

—忘れないこと、〈語りなおす〉こと、新たな〈共〉を生み出すこと¹

中村 美亜 (東京藝術大学助教)

人間はつらい経験をしても、忘れることで前を向いて生きていくことができる。しかし、それを本当に忘れてしまったら、私たち人類は生き延びることができなかつただろう。自然災害も、戦争も、個人個人のつらい経験も、完全に忘れ去るのではなく、それを未来への叡智に変換することで人類は生き延びてきた。言い伝えや記録文書はもとより、絵画、踊り、芝居、歌といったアートの表現手段は、過去に生きた人たちの遺志を未来へと継承するための貴重な方法であり続けた。

本稿では、エイズ・アクティビズムにおけるアートの役割に焦点をあてながら、人間どうしが時間や空間を超えてつながるメモリーワークの可能性について考えてみたい。メモリーワーク（記憶づくり）とは、過去の忘れ去りたい記憶を、他者とともに語りなおしつつ、新たな共有の記憶を紡いでいく作業を意味する。詳しくは後述するが、メモリーワークは、一種の癒しの行為であると同時に、新たな共有の記憶を生み出す社会的プロセスでもある。アートはこうしたメモリーワークを遂行するのに優れた手段といえる。

あらかじめ断っておくと、本稿でアートと呼ぶのは、ハイアート（高尚芸術）と言われる近代に制度化された美術（fine art）や音楽のことだけではない。もっと素朴な表現実践のすべてを含め、人間関係や社会のあり方に作用を及ぼす人為的な仕掛けをアートと呼ぶ。美学者の佐々木健一は、芸術の歴史を振り返りながら、「人間が自らの生と生の環境とを改善するために自然を改造する力を、広い意味での art（仕業）」と定義する [佐々木 1995, 31]。また芸術については、「予め定まった特定の目的に鎖されることなく、技術的な困難を克服し常に現状を超えてゆこうとする精神の冒険性に根ざし、美的コミュニケーションを指向する活動」と捉える [同上]。本稿では、このようにアートを人為的な仕掛けを創り出す表現実践として考えていく。

以下の議論では、まず〈語り〉について考えることから始める。私たち一人一人の人間は、〈語り〉を通じてアイデンティティを確立する。一方、アートは〈語り〉を他者とともにおこない、新しい〈語り〉を生み出すことを可能にする。〈語り〉は、人間とアートをつなぐキーワードなのである。その上で、1980年代以降のエイズ・アクティビズムを振り返りながら、アートの果たしてきた役割について見ていく。アメリカの ACT UP による Silence = Death プロジェクトや、世界に広がったメモリアルキルトの実践、日本のエイズ・アクティビズムを語る上で忘れることのできないダムタイプの「S/N」や、今世紀に入り東京を中心に展開した Living Together プロジェクトの活動を概観する。とくにクラブイベント「Living Together Lounge」に関しては、私自身のフィールドワークから明らかになったさまざまな仕掛けについて詳述していきたい。そして最後に「メモリーワーク」という観点から、今日の多文化社会においてアートのもつ可能性について展望する。

1. 〈語り〉と人間

私たちは普段、世界の中に自分がいて、世界にはそれ自身の〈語り〉や自分についての〈語り〉が存在すると考えている。学校では、日本史や世界史を学び、そうした定まった歴史の中で自分たちは生きていると考えるようになる。しかし、歴史というのは、それほど単純なものではない。戦争をめぐる「歴史問題」が端的に表しているように、歴史がどのように語られるかは、その語り手の立ち位置によって大きく異なるからである。支配者側か被支

配者側か、為政者か民衆か、男性か女性か。立ち位置が異なれば、自ずとその〈語り〉は異なる。20世紀後半に広まったフェミニズムやポストコロニアリズムの観点からの歴史記述は、こうした歴史の構築性を如実に暴きだしている。

そもそも、世界に〈語り〉があるのではなく、世界は〈語り〉によって理解される[矢守2010, 175-210]。世界が〈語り〉を形作るのではなく、〈語り〉が世界を形作るのである。このことは、例えば火星(人間と文化を共有しない生き物)が地球にやってきたことを仮定すれば容易に想像できるだろう。火星は、人間と他の生物を区別するのか? 地球の物語を人間中心に描くのか? 世界に何かが存在していて、それらが動いていることを見たとしても、火星人はどれとどれを一つながりのものと捉え、どれとどれを区別するのか? 何と何をどのように分節化するかは文化の問題であり、それを超越した所与のものではない。

これは歴史に限ったことではない。私たち一人一人の存在もまた〈語り〉によって形作られる。私たちの身体は新陳代謝を繰り返しており、今日ある肉体も、何年後には完全に入れ替わる。生まれながらに保持されているものはないのである。それにもかかわらず、私たち人間が一貫したものとして存在するとすれば、それは〈語り〉を保持しているからに他ならない。私たちは、遺伝的に獲得した自分の身体に関する情報や、その身体を通して体験される情報の中から必要なものを(意識的・無意識的に)選択し、それらとの関係から自分を規定する。アイデンティティと言われるものは、まさにこの〈語り〉によって形作られるのである。

このように考えるなら、私たち人間と世界の関係は次のように再定義される。世界というのは、「何かが存在する」という意味での物理的世界と、個々人の〈語り〉によって形作られる主観的世界からなる。主観的世界というのは、人それぞれによって異なっていて、どれをとっても完全に重なり合うことはなく、他者と共有することはできない。人間は世界を第三者的に見ているのではなく、自分が見た世界からのフィードバックで(他者からの反応を通じて)世界を把握しているため、私たちは他者の主観的世界を覗き見ることは不可能である。したがって、私たちは他者を完全に理解することはできない。

しかし、他者が見る世界をそっくりそのまま理解することはできなくても、他者と行為を共有することは可能である。単純な例では、誰かといっしょに何かを作れば、「何かをいっしょに作った」という共通の体験をもつことはできる。個々人は生き方や考え方が異なっており、お互いを理解し合うのは難しいが、どこか重なり合う共通の体験を持つことができれば、つながりを見いだすことは可能だ、ということである。

この個々人の私的領域をつなぐ部分を、ここではアントニオ・ネグリに倣って〈共〉の領域と呼びたい[ネグリ2005, 21-22]。〈共〉の領域は、公的領域とは異なっている。公的領域は、一つの超越的視点から見た〈語り〉によって構築される領域であり、私的領域と相容れないものである。別の言い方をすれば、「私」と「あなた」を包含する領域ではあるが、「私」でも「あなた」でもない部分にあたる。それに対し、〈共〉の領域というのは、私的領域と私的領域を結びつける拡張的・重複的な部分を指す。「私」でもあり「あなた」でもある領域を意味する。

自分と他者は、お互いが閉じている限り、異なっていて交わらない。しかし、体験を語ることで、重なり合う部分が生まれる。他者の体験を自分の体験と共振・共鳴させ、共有の新たな記憶を作っていくことで、他者と共存しながら個々人が社会で生き抜いていくことが可能になる。この共通の部分を生み出していけるかどうか、人間が生き延びることができるかどうかの境目である。

こうした点を踏まえるなら、アートはまさに、この共有の〈語り〉を生み出し、新たな〈共〉をつくっていくための有効な仕掛けと言えるだろう。物語、壁画、劇、歌など、人間は太古からさまざまな表現実践を通じて、自分の体験を他者に共有可能なものへと変換しようと試みてきた。そうした試みは常に成功するとは限らないが、自らが試行錯誤を繰り返すことで、あるいは、技術(先人の成功失敗体験から培われた技)を継承することで、成功を導きだしてきた。アートは、自分の経験を他者に伝える方法であり、人類が生き延びるための叡智だったのである。

次節以降では、こうした〈語り〉を再編する生き延びるための叡智としてのアートを、エイズ・アクティビズムの例に見ていきたい。

2. エイズ・アクティビズムとアート

エイズは単なる疾患ではなく、社会的な病でもある。HIV ウィルスに感染すると、免疫力が著しく低下し、死に至る。エイズは人々を恐怖に陥れる「死の病」であった。しかし、エイズはそれだけでなく、社会からの謂れのない差別を助長し、感染者を二重に苦しめてきた。

1980 年代にこの病気が突然アメリカで広まった時、「同性愛の病気」という誤った情報が蔓延した。特殊な人たちの病気と誤認されたことで、アメリカ政府や医療機関の対策も大きく出遅れ、感染が広範囲に及んだ。日本の行政や社会のエイズに関する対応も同様だった。1985 年の日本での「エイズ一号患者」の報道は、事実とは異なる形で「アメリカ在住の日本人男性同性愛者」という属性と結びつけられ、HIV 陽性者に蔑視のまなざしを一気に浴びせかけた [風間・河口 2010]。性に対する社会の偏見が、エイズに関する問題をより深刻化させたのである。

アメリカ政府の腰のひけた対応を強く非難し、HIV/AIDS が重要な社会問題であることをもっともインパクトのある形で世界に知らせたのが、クィア・ムーヴメントとして知られる ACT UP (AIDS Coalition to Unleash Power) の一連の抗議行動だった。1987 年に劇作家のラリー・クレマーによって組織された ACT UP は、デモという古典的な手法だけでなく、創意工夫を凝らしたさまざまなアートの手法でアクティビズムを実践していった [毛利 2003]。

中でも美術史家ダグラス・クリンプが主導した「Silence = Death プロジェクト」は有名である。「Silence = Death プロジェクト」というのは、黒地にピンク色 (ショッキング・ピンク) の三角形を描き、その下に白の等幅フォントで「Silence = Death」(沈黙は死を意味する) という言葉をあしらったポスターやバッジを用いて、人々に声をあげることを呼びかけた運動である。(ピンクの三角形は、第二次世界大戦中にナチスが大量の同性愛者を強制収容して殺害した際に胸章として使われた。) このプロジェクトでデザインに関わったアヴラム・フィンケルシュタインは、ユダヤ人同性愛者に知られていたピンク・トライアングル (三角形) を用い、それに効果的なデザインを施すことで、当時沈黙をつらぬいていた同性愛者に訴えかけようとしたと語っている²。無関心を装う人々の意識に働きかけるためには、要求をつきつけるだけでは十分ではなく、アートを用いたアプローチによるアクティビズムが不可欠だったのである。

その一方で、エイズで亡くなっていた人たちの記憶をキルトに留め、それを受け継いでいこうとする「エイズ・メモリアルキルト」の活動も始まった³。亡くなった人たちのことを「忘れない」というこのアクティビズムは、エイズでなくなった人たちの名前を施したキルトを制作し、それをパネルのように並べて展示する。故人の思い出を託したキルト制作という喪の行為がエイズによる大勢の人々の死を視覚化し、人々に予防を喚起する。ケアと予防が一体となったこの活動は、現在も世界各国で進行中である。

日本では、アーティスト古橋悌二の活動が特筆に値する。京都を中心に活躍するアーティスト集団ダムタイプに所属していた古橋は、HIV 感染をきっかけに、自らが HIV であること、そしてゲイであることを、芸術的な表現を駆使して人々に突きつけていった。1994 年にオーストラリアで初演された「S/N」は、古橋のカミングアウトを高度な芸術表現へ結実させた。S はシグナル、N はノイズ、その間のスラッシュは境界を表す。ハイテクを用いた最先端の舞台手法というダムタイプのこれまでの表現様式に、エイズや同性愛をとりまく人間模様に対する痛烈な批判を含めた演劇や舞踊表現を融合させた作品である。古橋は 1995 年に亡くなったが、「S/N」の記録映像は現在でも世界中でしばしば上演され、多くの人たちの心に強く訴えかけ続けている。

21 世紀に入り、先進国でのエイズをめぐる状況は少しずつ変化し始めた。インターネットの普及によってエイズ

についての情報にアクセスしやすくなり、また、HAART と呼ばれる薬事療法が開発されるに至り、偏見や差別も少しずつ和らいできた。しかしながら、日本では、HIV 陽性者が自分の感染を周囲にカミングアウトすること自体も困難な状況の中で、HIV の新規感染者数（とくに男性同性愛者間）の増加傾向に歯止めがかからなかった。

特定非営利活動法人ふれいす東京の生島嗣は、エイズに関する情報が身近なものになったといっても、そのリアリティをうまく伝える手段がないことに問題があると考え、HIV 陽性者に手記を書いてもらい、それを通じて人々にエイズのリアリティを伝えようと試みた。匿名の手記であれば、カミングアウトは必要ない。実際に、集めたいくつかの手記をコピーしてイベントで配布してみると、予想外の大きな反響があった。冊子も作ろうという話になり、最初の冊子「Living Together」ができあがった。こうして 2003 年、「多様性を伴った視点から『全ての人が HIV とともに生きている』というリアリティを共有するため」の Living Together プロジェクトが始まった[生島 2004]。

古橋の死後も、彼の意を継いで活動を続けるアーティスト／アクティビストは数多く存在した⁴。その一人が Living Together プロジェクトの中核を担う「Living Together Lounge」をリードしたアーティストの張由紀夫である。張は大学時代に先輩だった古橋のアーティストとしての、そして、ゲイとしての生き方に強く影響を受けた。次節では、この Living Together Lounge に焦点をあて、そこに隠されたさまざまな仕掛けについて考えていきたい。

3. Living Together Lounge

「HIV を持っている人も、そうじゃない人も、ぼくらはもう、いっしょに生きている。We're already living together.」このフレーズを旗印にしたクラブイベント Living Together Lounge は、ふれいす東京とレインボーリング（当時）の共同主催で 2004 年 9 月に始まり、2012 年 4 月までの間、新宿二丁目のクラブで毎月開催された。イベントは二部構成で、第一部では二人のゲストが自分の選んだ手記を朗読し、その手記を読んで心に浮かんだことを自由にトークする。第二部では、三人目のゲストが朗読とトークをおこない、音楽のライブ・ショーとなる。朗読が始まる前と休憩の間には DJ が入る。クラブに集まった人たちは、手記朗読やトークに耳を傾けながら、そこに自分の思いを重ね、その後のライブ音楽を楽しむ。

手記朗読には多方面からゲストが招かれる。新宿二丁目コミュニティの人たち（ゲイバーの「ママ」や常連）をはじめ、行政関係者、医療従事者、マスコミ関係者、アーティスト、HIV の予防啓発や陽性者支援に関わっている人などさまざまである。Living Together Lounge が始まった頃、バーの「ママ」たちの中にはこのイベントに批判的な人も多かった。こういうことをすると、エイズとゲイが結びつき、ゲイに対する偏見が余計に助長されるというのが、主な理由である。しかし、次第にそういう声はほとんどなくなり、Living Together Lounge は新宿二丁目の人気のイベントになった。定期的なラウンジ開催に加えて、アーティストックなデザイン・パッケージに入ったコンドームを無料配布する「デリヘル・プロジェクト」（デリバリー・セクシュアル・ヘルスの略）や出張啓発イベントを地道に重ねてきた成果が実った。HIV 陽性者がカミングアウトしながら手記を読むことも希ではなくなった。ラウンジが始まった頃には想像できなかった光景である。

ライブにも、さまざまなジャンルのミュージシャンが招かれ、45 分程のショーを繰り広げる。ギターの弾き語り、軽めのロック、ジャズ、ラテン、歌謡曲、ウクレレ・アンサンブルなど、さまざまである。歌謡ショー形式の時もある。パフォーマンスがおこなわれる場合もある。プロ、セミプロ、アマチュアとレベルも多様で、ラウンジでお馴染みとなった顔もあるが、初登場のグループも多い。誰が HIV であるか、誰がゲイであるかは基本的に問題とされない。

Living Together Lounge が音楽イベントたる所以は、ゲスト・アーティストのライブ演奏にある。しかし、それと並んで、もしかしたらライブ以上に、このラウンジの独特な効果を演出しているのが DJ である。一つは、Living

Together Lounge という場の雰囲気を設定する役割、もう一つは、その場に参加している人たちの緊張を和らげるなど、進行に即して参加者の身体的心理的な状態に直接働きかける役割である。最初の点はDJの機能として広く認知されていることだが、二つめの点はLiving Together Lounge 独特の特徴といえるだろう。

ラウンジを始めた頃、Living Together Lounge に来た人たちは「みんなびっくりしていた」と、DJを担当するwaraは振り返る。手記朗読の最中など重苦しい雰囲気になってしまい、朗読後は、皆もうどうしたらよいのか戸惑っている様子だった。今でもwaraが最も気を使うのが、リーディングが終わった直後にかかる音楽である。どんな音楽をかけるかで会場の雰囲気が一変するからである。朗読される手記やその後のトークは、自分の世界にどっぷり浸かっているものが多い。その調子に合わせて音楽をかけると、手記の世界から逃れられなくなり、会場全体が重苦しい雰囲気に包まれてしまう。かといって、手記と全然関係のない陽気な曲をかけると、今度は、それまでのトークの内容がしらじらしく感じられてしまう。そのためwaraは、手記やトークを聞きながらその内容に沿いつつ、その日全体のDJの構成にも配慮しながら、クラブの雰囲気を整える音楽を即興的に選んでいく。

もう一つ、waraがいつも気を配っているのが、手記朗読がおこなわれている間のBGMである。朗読が始まるとずっとドライなビートが入り、トークが終わると消える。今ではルーティン化しているが、最初の頃は試行錯誤だった。張から「何か音を出してほしい」と言われ、ポエトリー・リーディングで使われるBGMをいろいろ調べたが、「あまり色のあるものはよくない」と思い、リズム・ビートだけにすることにした。最近よく使うものは4拍子2小節の繰り返して、リズムの刻みが二層のシンプルなものである。小節の頭でコード(和音)が1拍ずつ鳴る以外、音程の変化はない。

ただし、どんなビートの組み合わせを用いる時でも、BPM (beat per minute) は平常時の心拍数に合わせるようにしている。ラウンジでステージにあがったリーディング・ゲストは緊張していることが多い。朗読や話を聞く側にしても、その話しぶりにハラハラさせられたり、内容に動揺させられたりして、緊張してしまうことが多々ある。それにもかかわらず、会場にいる人たちがリーディングの最中に過度な緊張を感じないとすれば、それはいつも後ろで落ち着いたビートが刻まれているからなのである。

ところで、Living Together Lounge をエイズの予防啓発イベントとしてみた場合、ラウンジでの音楽ライブは単なるおまけとしか見なされない。しかし実際には、ラウンジの面白さは、手記朗読とライブ音楽がセットにされているところにある。

常連のIは、ライブに出演するミュージシャンにはおおよそ4つのタイプがあると説明する。①手記に刺激されてオリジナル曲を作り、それをライブで演奏するタイプ。②ライブの途中で手記を朗読し、それに合った音楽を続けて演奏するタイプ。(この場合、手記にコメントをするケースと、何もコメントをせずに音楽を続けるケースがある。)③手記のテーマやキーワードと結びついた選曲でライブをするタイプ。④手記の内容には敢えて触れず、とにかく「楽しみましょう」というタイプ。数としては、②③のタイプが多い。わざわざオリジナルの曲を作らないとしても、後述するように、手記を読んだ後の特別な思いを抱きつつ歌をうたう、あるいは、このイベントのために用意した特別なプログラムで演奏するというのは、その場を共有する人たちにとって重要な意味をもつ。

また、Iはラウンジの音楽体験を「化学反応」という言葉を使っても説明してくれた。「たぶん、(参加した人)それぞれが(リーディングの間にもった感情を)抱えたままに、ライブにいってるんですよ。それはいい感情かもしれないし、そうじゃないかもしれない。だけど、何かは持っているんですよ、その時点で。音楽からいろんなことが、化学反応を起こすっていうのはそこなんだと思います。単純に音楽を聞きにいくと、その音楽の力でしか反応しないじゃないですか。」Living Together Lounge では、その日に読まれた手記やそれに続くトーク、そして、それらによって呼び覚まされた個人的な記憶や思いなどを抱えながら、聴き手はライブに入っていく。すると、音楽がそれらを昇華させたり、嫌な気持ちを忘れさせたりする。時に思いがけない「化学反応」を引き起こすのであ

る。

一方、スタッフの張は、「魔法」という言葉を使って次のように話してくれた。「うちの場合、そんなに上手じゃないライブだったりする時でも魔法がかかるときってあるじゃないですか。朗読があることによって気づくっていうことがありますよね。ライブだけで気づかなかった事が、朗読の内容と確認できた時に。ライブが始まると、バーンと増幅することと違って全然ありうるじゃないですか。」異なるコンテキストに音楽がおかれると、その音楽が脱構築され、新たな意味を生み出すことがある。

加えて、Living Together Lounge では別のタイプの「魔法」がかかることもある。ゲストのトークが、次のゲストのトークを触発し、そのトークがミュージシャンによるライブへとつながり、クラブ全体がある種の一体感で包まれるという意味での「魔法」である。もちろん、こうした「魔法」は毎回生じるわけではない。そもそも「魔法」はあらかじめ計画をして達成できるものでもない。しかし年に数回はラウンジで「魔法」がかかり、圧倒的な体験を会場に居合わせた多くの人が共有するということが起こる。

Living Together Lounge では、聴き手や出演者がリーディングの間に抱いた思いが、ライブで音楽と結びついて「化学反応」や「魔法」を呼び起こす。こうした反応は、ライブでの音楽的パフォーマンスの質が高いほど起きやすいとはいえ、そのみに依存しているわけではない。聴き手や出演者がリーディングの際に何も感じなければ、それは起こらないし、一方だけが感じていても、そうした瞬間は訪れない。それはむしろ、Living Together Lounge に施されているさまざまな仕掛けと、その場で起きる様々な出来事が組み合わさることによってはじめて生じてくるのである。

このように、Living Together Lounge では、張やwara たちが試行錯誤を重ねながら見いだしてきた仕掛けを通じて、すなわち、会場設定、当日の進行、張の語り、DJ、ライブの方法などを一つの儀式的フレームワークとして作り上げていくことによって、「化学反応」や「魔法」の起きる確率が高められる。実際ここでは、ミュージシャンがLiving Together のポリシーと無縁に自分の好きな音楽世界を表現するわけにはいかない。事前に手記を読んだ体験や直前に聞いた手記朗読とトークが何らかのフレームを形づくり、普段とは違う音楽パフォーマンスが生まれるのである。また、ラウンジにきた人たちも、Living Together Lounge のフレームに沿って手記朗読やトークを聞き、そこで抱いた思いとともにライブに参加することで、普段とは違った聴取をおこなうことになる。

4. メモリーワークとしてのアート

地理学者のカレン・ティルは、南アフリカの元人種差別地区におけるアート・アクティビストたちの活動を記述した論文の中で、「過去の暴力や不当な行為を再度思い返しながらか、その喪失やトラウマを克服し、近い未来をより社会的なものとして思い描くようにしていくプロセス」を「メモリーワーク」と表現した [拙訳、Till 2008, 110]。Living Together Lounge で見た〈語りなおし〉、すなわち、手記を通じて過去の出来事を振り返りながら、それを新しい共有の記憶に編みなおしていくという作業は、まさにこのメモリーワークと言うことができるだろう。

独特な言葉使いや口調がそのまま残された手記の語りを、読み手が声に出して読む。読み手はさらに自分の中に生まれた思いを声に出して話す。会場の人たちはそれらを聞きながら、自分自身の内なる声に耳を傾ける。この作業が繰り返された後に、音楽に重ね合わされた〈声〉が響く。音楽に重ね合わされた〈声〉というのは、アーティストが音を生み出す際に込めた思いであり、聴き手がその音に見出そうとした思いである。演奏される音楽が既存曲の場合は、別のコンテキストで作られた音楽の語りに、新しい語りが重ねられることになる。こうした音楽の〈語りなおし〉を経て、個々人のばらばらの声ではなく、自他や主客の境界が融解した〈共〉の領域が現れ出る。Living Together Lounge のライブ音楽には、このプロセスを表象可能、共有可能、記憶可能なものにする働きがある。

このような〈語りなおし〉による記憶の編成は、先述したフェミニズムやポストコロニアルな観点から書かれた

歴史記述とも同種のものである。為政者の観点による公的な歴史（大文字の **History**）ではなく、個人的な関心から出発した歴史（小文字の **history**）を生み出すことによって、自身と世界の間を再編し、それを通じて自身が世界に対して有する効力を確認する。

一方、同様のことはカウンセリングの場面でも見られる。「ナラティブ・セラピー」と呼ばれるものである。ナラティブ・セラピーでは、クライアントのもっている自己認識が、これまで経てきた一連の体験についての一つの解釈に過ぎないことを自覚させ、もう一度自分と過去の間を再構築しながら語りなおすことで、自分と世界の間を結びなおそうと試みる [White 1993; 野口 2002]。アートの実践も、人間一人一人は外部の環境（自己ではない他者）と固定的に対峙しているのではないという事実を暴き出しながら、語りなおしを通じて環境（他者）と自己の間を再構成していくものとして機能するならば、それはナラティブ・セラピーと同様の効果を生み出すことになる。

本稿では、つらい体験を「忘れない」こと、その体験の「語りなおし」を通じて世界と自分の間を再編すること、また他者と自分の境界変容を促し、「新たな〈共〉を生み出す」ことを、エイズ・アクティビズムの具体的事例を通して見てきた。エイズ・メモリアルキルトや **Living Together Lounge** のようなアートを通じたメモリーワークは、自己と他者の間の境界変容を促し、それを通して新しい〈共〉の領域を生み出す。人々をエンパワメントすると同時に、社会の漸進的な変容を促す効果的な事例と言える。

人々は〈共〉がなければ、孤立する。一方で、〈共〉が固定されると、個は抹殺される。私たちは〈共〉をつねに動的なものとして更新し続けることによってのみ、個の多様性を維持しながら生きることが可能となる。したがって、多文化社会で共存をはかるためには、表現実践を継続的におこなうことが不可欠である。私たち人間は、忘れたいつらい経験を〈語りなおす〉ことで〈共〉を開き、未来への叡智に昇華させる術を持っている。私たちはこのことを忘れてはならない。

注

¹ 本稿は2013年6月14日に立教大学でおこなわれた同名の講演を文章になおしながら、大幅な改訂を加えたものである。なお、講演内容自体は拙著『音楽をひらく』[中村 2013]に基づいている。議論の詳細については、そちらを参照されたい。

² “Avram Finkelstein: Silence=Death” と題された YouTube 上のインタビュー (<http://www.youtube.com/watch?v=7tCN9YdMRiA>)。

³ The AIDS Memorial Quilt (<http://www.aidsquilt.org/>)。

⁴ AIDS Poster Project は1993年に設立された。ポスターなどのヴィジュアル表現を通してエイズに関する情報やメッセージを発信することを目的にする (<http://aidsposter.web.fc2.com/index.html>)。

文献表

生島嗣 2004 「LIVING TOGETHER という戦略：リアリティをどう共有するのか」 *The Journal of AIDS Research*: 126-128

風間孝・河口和也 2010 『同性愛と異性愛』 岩波書店

佐々木健一 1995 『美学辞典』 東京大学出版会

中村美亜 2013 『音楽をひらくーアート・ケア・文化のトリロジー』 水声社

ネグリ、アントニオ 2005 『マルチチュードー〈帝国〉時代の戦争と民主主義』 (上)、幾島幸子訳、水島一憲、市田良彦監修、日本放送出版協会 (NHK ブックス)

野口裕二 2002 『物語としてのケア：ナラティブ・アプローチの世界へ』 医学書院

矢守克也 2010 『アクションリサーチー実践する人間科学』 新曜社

毛利嘉孝 2003 『文化=政治』 月曜社

Till, Karen. 2008. “Artistic and Activist Memory-Work: Approaching Place-Based Practice.” *Memory Studies*, 1 (1):

99-113.

White, Michael. 1993. "Deconstruction and Therapy." In *Therapeutic Conversations*, edited by Stephen Gilligan and Reese Price, 22-61. New York: W.W. Norton.